

# 「一つの花」 あらすじ

名まえ ○○ ○○○

一行あける

戦争がはげしかつたころ、食べる物といえば、おいもや豆やかぼちゃしかなかった。ゆみ子は、いつもおなかをすかせ、食べ物をもつともつとど言っつていくらでもほしがつた。

すると、ゆみ子のお母さんは、  
「じゃあね、一つだけよ」  
とど言っつて自分の分から一つ、ゆみ子に分けてくれた。

-1-

そこで、ゆみ子は、知らず知らずのうちに「一つだけ」とど言っつて、お母さんの口ぐせをおぼえてしまった。

一行あける

お父さんが戦争に行く日も、ゆみ子は、  
「おじぎり一つだけちようだい」  
とど言っつて、駅につくまでに、おにぎりをみんな食べてしまった。

いよいよ、汽車が入ってくるというときになって、また、ゆみ子の「ひとつだけ」が始まったが、おにぎりはもうなくなっている。ゆみ子は、どうどう泣きだしてしまっ

た。お父さんは、わすれられたようにさいいていたコスモスの花を見つけた。それを手に帰ってきたお父さんは、

「ゆみ。ひとつだけあげよう。」

といて手わたした。ゆみ子は喜び、お父さんは、にっこり笑うと、何も言わずに、汽車に乗って行ってしまった。

一行あける

それから十年。ゆみ子のとんとんぶきの小さな家は、コスモスの花でいっぱい包まれている。ゆみ子が、小さいお母さんになってお昼を作るある日曜日、買い物かごをさげたゆみ子が、スキップをしながら、コスモスのトンネルをくぐって出てきた。